

## 江戸川乱歩「黒蜥蜴」論——黒蜥蜴の人物表現について

古閑裕規

はじめに

「黒蜥蜴」は昭和九年一月から十一月にかけて(二月休載)、雑誌『日の出』(新潮社)に連載された江戸川乱歩の長編小説の一つである。美貌の女賊黒蜥蜴と名探偵明智小五郎による宝石屋の令嬢岩瀬早苗と至宝「エジプトの星」をめぐる知的闘争と、敵同士のはずの二人の恋愛模様とを描いた物語となっている。

作品の特徴として、大内茂男氏(二)が「強いて犯人を伏せた探偵小説的構成をとらず、大部分を女賊の側から描いたために、かえってすっきりした出来栄になった」と言うように、犯人が物語の最初から判明している倒叙形式をとっている。物語の大半が女賊黒蜥蜴視点であり、主要人物として設定されている彼女の人物造形、そのモデルについては、先行研究でも考察されている。

堀江珠喜氏(三)は、昭和ベルエポックの女性像を示した作品の一つに「黒蜥蜴」をあげている。作品冒頭で黒蜥蜴が全裸で「宝石踊り」を披露する姿は「サロメかマタ・ハリを連想」させ、ダンス場から始まるレビュー性や、その後男装姿で現れる

ことに注目し、そこから「宝塚や松竹の男役スターを連想」している。これらの要素から当時「話題のヒロインであった」川島芳子(四)にも重ねあわせている。「皇后婉容の天津脱出を助けた男装の麗人芳子は、まさに英雄であり、東洋のマタハリ、あるいは東洋のジャンヌ・ダルクと呼ばれる「時の人」だった」、また芳子は踊りの名手でもあり、「ダンサーの華やかなイメージこそ、スパイ・マタハリと芳子を重ね合わせてレビュー性をまとわせるものであった」と、マタハリ的な側面を強調して女賊黒蜥蜴に川島芳子を投影している。

海老澤彩香氏(五)は「少女歌劇の男役スター」や川島芳子のほかに、女賊黒蜥蜴のあだ名の由来となった黒蜥蜴の入墨から谷崎潤一郎の「刺青」(『新潮』明治四十三年十一月)の影響をあげている。

中相作氏(六)は、黒岩涙香「片手美人」(『万朝報』明治二十二年五月十七日―七月二十七日連載)の主人公が「ポーランドの公爵令嬢で、ロシア政府の圧政に抵抗する愛国者組織の首領」で「絶世の美人」、パリの銀行に盗みに入る女賊、「終幕には毒によって死を迎える貴婦人」であることから、「黒蜥蜴のひとつの原型だったと考えることも不可能ではない」としている。

このように、先行研究においては女賊黒蜥蜴のモデルについて、同時代の流行からの影響を除けば、谷崎潤一郎や黒岩涙香といった乱歩への影響が明らかな作家があげられるにとどまっている。また同時代の流行について、堀江論、海老沢論の指摘は最もであるが、「黒蜥蜴」執筆当時、川島芳子や男役スターが大衆へどのように伝えられていたかという点で更なる考察の余地が残されていると思われる。

本稿では女賊黒蜥蜴のモデルについて考察を行う。まず黒蜥蜴の形容として作中で用いられる「男装の麗人」という語に着目し、新聞を中心としたメディアから使用状況を確認することで、同時代の流行の影響を見ていく。次に、同時代の流行からでは説明できない黒蜥蜴のモデルについて、作中でも歌舞伎の演出が形容として使われていることから、歌舞伎作品との関わりを検討する。最後に演劇性という観点で、女賊黒蜥蜴のモデルが形成されていることを明らかにする。

## 第一章 「男装の麗人」という語に見る

### 黒蜥蜴の同時代性

本章では「男装の麗人」という語に焦点をあてる。「黒蜥蜴」が連載を開始した昭和九年一月発刊の『日の出』第三巻第一号掲載分の中で女賊黒蜥蜴は「男装の麗人」と形容されている。

さう命令しながら、男装の麗人は、自動車へのヘッド・ライトもテール・ライトも車内の豆電灯も、すっかり消してしまつた。  
(「地獄風景」章)

執筆当時の流行を検討し、乱歩がこのように黒蜥蜴のことを表

現した意図について考察する。

「男装の麗人」という語の執筆当時の使用状況を、新聞を手掛かりとして概観する。管見の限り最も早く「男装の麗人」という語が新聞に登場するのは、昭和八年二月二十二日の『東京朝日新聞』の夕刊である。そこには見出しで、「男装の麗人川島芳子嬢／熱河自警団の／総司令に推さる／雄々しくも兵匪討伐の陣頭に」とある。この後も「男装の麗人」という語は川島芳子に関する記事で見られる。これは村松梢風の小説の影響であろう。村松梢風は川島芳子を題材とした小説『男装の麗人』を雑誌『婦人公論』（中央公論社）に昭和七年九月から連載し、同タイトルの単行本を翌八年四月中央公論社より刊行した。その復刻版が平成十年に大空社より刊行されているが、その「解説」で滝口浩氏が「一説によれば『男装の麗人』という言葉も、本書で梢風が造語したという事でもある」と述べている。

新聞における「男装の麗人」という語の使用は村松梢風の造語から始まったと考えられる。それを裏付けるものとして当時の新聞語辞典を参考とする。昭和八年十月、栗田書店より千葉亀雄が編者となって『新聞語辞典』が刊行された。その序文で千葉はこのように言っている。

現代新聞の読者が弱り切る一つの悩みは、すでに無数の旧新聞語がある上に、更に無限な「新語」の大量生産があることであらねばならぬ。「新語」の大量生産は、今まで無かつた新知識や、新現象の大量生産を意味する。およそ現代に生きて、能率的な生活を営まうとする民衆にとつて、何より貴重なのが、この新知識と、新現象の把握であらねばならぬ。それが為には、新知識と新現象を象徴する、「新

「聞語」を理解せずに、その目的が達せられない。旧新聞語の一切と共に、大量生産される新聞新語の、殆ど全部を網羅して、モダン文化索引たるべき「新聞語辞典」出現の動機がここにある。

凡例にも「今日の新聞・雑誌の各欄に現れるあらゆる新語・術語・時事問題・事件・人名等を網羅し」とあるように、千葉の熱意が見て取れる。この辞典中に、「男装の麗人」という語は立項されていない。発売時期からして、新聞に「男装の麗人」という語は使用されているが、まだ新聞語として認識されていなかったようである。この『新聞語辞典』は三年後の昭和十一年十月に増補改訂版を刊行している。その増補改訂版の序文には、「茲に本書の増版を刊行するに当り、故千葉先生の意を体して、前版の誤植を正し内容の厳正改訂を行ふとともに、新たに七百数項の新語、新熟語を加へて、即ち時勢に順応したる最新完璧の「新聞語辞典」となるよう努力した旨が、栗田書店編輯部名義で書かれている。この増補改訂版の追加語の中に「男装の麗人」も含まれる。それを次にあげる。

だんそうのれいじん（男装の麗人） 満州事変や上海事件が発生すると共に常に男装して戦線に幕営に猛将勇率に伍して活躍し遂に満州国の成立までに發展せしめた、東洋のジアンダークを以て自ら許す麗人川島芳子のことをいふ。

二代の男装の麗人は日活スター西條エリ子の女パトロンとして三面記事に名声を伝へた大阪の増田富美子のこと、男装の麗人から無軌道娘に發展し、遂にアダリンを服用したが事なきを得た。これらの両人が男装の麗人の代表

者である。

ここからわかることとして、「男装の麗人」という語が新語として認識されたのが昭和八年から昭和十一年の間であること、その代表人物が川島芳子と増田富美子<sup>⑤</sup>であること、二点である。二代目とされている増田富美子が騒がれるのは昭和十年のことなので、やはり「男装の麗人」という語は村松梢風の小説から来た語で、「黒蜥蜴」執筆当時は川島芳子を指す語として認識されていたと言える。

『男装の麗人』<sup>⑥</sup>では清朝の公女・満里子が×××（筆者注…「日本軍」と思われる）のスパイとして活動しており、上海での生活に密着する形で物語が展開されている。満里子のモデルが川島芳子であり、上海で取材をしたことは、『男装の麗人』の最後に「私を見た川島芳子さん」として記されている。そこで梢風は、モデルの川島芳子について次のように語っている。

物のついでに御披露するが、芳子さんは社交ダンスの名人だ。それもリーダーとしてよりは男役の方が上手だ。上海で世界各国のチャンピオンが出るソシアル・ダンス競技会でワルツを踊って一等を取ったそうだ。私は毎晩拝見の光栄を有したが、まったく美事なものだ。

鉄砲、乗馬、自動車の運転、そういう技術は何れも彼女の得意とするところだ。自動車などは本職の運転手はだしだ。

作中でも満里子が毎晩ダンスホールに通っている描写や、自動車を運転している描写がある。「黒蜥蜴」冒頭の「暗黒街の女王」章から「地獄風景」章にかけての話はこの梢風の記述の流れのままである。黒蜥蜴は暗黒街のダンス場で女王として君臨

し踊りを披露し、雨宮潤一の相談を受けたあとタクシー運転手に変装して車の運転をしている。梢風は川島芳子を「珍しい才能の所有者」と言っており、これは内容的にも「女性にしては」というニュアンスが感じられる。タクシー運転手姿の時に男装を披露し、雨宮潤一に「あなた運転できるんですか」と言われているところは、この梢風の記述が念頭にあったからだと考えられる。

また『男装の麗人』において、仕事仲間の高村と満里子の関係は、同僚以上愛人未満のように描かれている。満里子は高村が男の虚栄心を發揮して自分のものにししようとすることを軽蔑しながらも、「高村の男性的な姿を見ないと淋しい日もある」と複雑な思いを抱いている。その関係は、

高村は、元来非常な乱暴者だけれど、不思議にも満里子の前へ来た時だけは、猫のように温和しくなる。時には、番犬のように忠実でもある。それと反対に、満里子は、女王のように威張ったり、主人のように我儘を云ったり、子供のように駄々をこねたりすることが出来る。

と記されており、女賊黒蜥蜴と雨宮潤一の間係を彷彿とさせる。エ、僕は甘んじて女王様の奴隷になります。どんな卑しい仕事でもします。あなたの靴の底にだって接吻します。その代り、あなたの産んだ児を見捨てないで下さい。ねえ、見捨てないで。

(「ホテルの客」章)

色敵を殺してしまうような不良青年も女賊黒蜥蜴の前ではおとなしい忠実な奴隷となる。満里子と高村の関係性と異なり、黒蜥蜴と雨宮潤一の間には擬似的な母子関係が形成されている。しかし、その母性についても、満里子にモデルを見ることがで

きる。満里子は親に売られた書連という少女を二千二百ドルも大金で購入し、「僕の娘」と言っておかしいがっている。眠っている書連を「可愛くて堪まらぬように相好崩して見入」っている様は母性を感じさせる。奴隷という訳ではないが、金で買った娘と母子的関係を結んでいる点は類似していると見える。満里子は書連を購入する際高村をはじめ数人から借金をしており、その返済の為にダンサーとして活動を始める。高村は清朝の公女がダンサーになることについて苦言を呈すが、それに対して満里子は、

僕はさう思はないな、清朝の皇族なんて云ったって、それは朝廷があつてこそその皇族なんだ、現在の我れ〜みたいな、社会から冷遇され、普通の人民以上に権力の圧迫を受けて逃げ廻って歩いている人間が、皇族の誇りだけを背負はせられてゐなければならぬといふことになれば、可成りじめなことぢやないか、寧ろ滑稽だよそんなことは、僕は取るに足りない女だけれども、復讐運動のためにはいつでも小さな牝になつて来た。(中略) 君や、世間の人は、僕を単なる不良少女だと思つてゐるかもしれない、僕は不良少女で甘んじる、けれども僕は死ぬまで国民党と戦う決心でゐるんだ、僕には人生の快樂も、理想も、女としての満足も、何一つ無いよ、只僕は、自分が殺されるまで戦ふのだ、其のためには、どんな事でもする、恥かしいだの、不体裁だの、そんなことは考へない、ダンサーになるくらゐは屁でもないと思つてゐるのだ、(後略)

と、国民党を打倒し清朝を復古することへの強い決意を語る。強い信念を持つて行動する女性像は「東洋のジャンヌ・ダルク」

の異名を彷彿とさせる。梢風も「私の見た川島芳子さん」で川島芳子がラジオ講演で「東洋のジャンダルク」として激賞された」というエピソードを記しており、この異名を意識していたと思われる。

川島芳子の異名は現在「東洋のジャンヌ・ダルク」、「東洋のマタ・ハリ」の二つが知られているが、「黒蜥蜴」執筆当時の状況について見ていく。同時代の新聞記事では、管見の限り異名と共に川島芳子を報じているものは見られなかった。しかし先述した『新聞語辞典』の「男装の麗人」項の説明では「東洋のジャンダルクを以て自ら許す麗人川島芳子」と説明がなされている。また、昭和七年九月に公開された映画『満蒙建国の黎明』は川島芳子をモデルとして作られている。そこで主役を務めた入江たか子は、川島芳子をモデルとした彩風姫を「満蒙建国の蔭に咲く東洋のジャンヌダルク」<sup>(五)</sup>と評している。川島芳子も「世間では、又おぞましくも、僕の事を、やれ東洋のジャンダルクだの、何だのと、途方もなく持ち上げるものがある」<sup>(六)</sup>と自身がそのような異名で呼ばれていることを認識していた。同時代においては「東洋のジャンヌ・ダルク」という異名が使われていたことが確認できる。一方「東洋のマタ・ハリ」という異名が見られるのは戦後である。戦後スパイとして中国で拘束された川島芳子が裁判に出廷することを報じた記事で、「満州、華北にかけて国際スパイとして活躍した『東洋のマタハリ』金壁輝（川島芳子）」<sup>(七)</sup>、「満州事変以来満州華北にかけて国際女スパイとして活躍した『東洋のマタハリ』川島芳子こと金壁輝」<sup>(八)</sup>と記されている。以上より、「黒蜥蜴」執筆当時の川島芳子は「東洋のジャンヌ・ダルク」という救国の乙女のイメージ

ジで語られていたことがわかる。「東洋のマタ・ハリ」という女スパイのイメージに転ずるのは戦後のことである。

「男装の麗人」という言葉をもって表される黒蜥蜴と川島芳子であるが、その容姿の違いについては検討しなければならぬ。先にあげた『新聞語辞典』の記述を見ても分かるとおり、「男装の麗人」と称される川島芳子も増田富美子も普段から男装をして生活している。『男装の麗人』の満里子も普段から男装でイガ栗頭をしている。カツラをかぶり女装をしてダンスホールに繰り出すシーンはあるが、満里子は「久世先生（筆者注…モデルは梢風）が俺を小説に書くのに、イガ栗頭ばかり見ていちやあ感じが出ないと云うから、今日始めて女形をやって御覧に入れるのさ、もう誰に頼まれたってこんな真似は二度としやあしねえ」と言っており、確かに作中での女装もこの場面のみである。黒蜥蜴はというと、挿絵から「黒衣婦人」と称されるように黒ずくめのドレスで断髪姿が基本であるとわかる。

満里子と黒蜥蜴の共通点としてダンス場に通いダンスを披露していたことは先に示したが、「黒蜥蜴」執筆当時、断髪洋装の女性が踊り等を披露する場として、他にレビュー劇場が考えられる。二人の容姿の相違点を検討する為、「黒蜥蜴」と同時期に『講談倶楽部』で連載していた「人間豹」<sup>(九)</sup>におけるレビューガールの記述について確認する。

「人間豹」には「レヴィウ団の女王」と讃えられる江川蘭子という断髪洋装のレビューガールが登場する。「中学生という中学生、女学生という女学生を、夢中に昂奮させる」とあり、これも当時の世相を反映していると思われる。

日本で初めて断髪の男役として一世を風靡した水の江瀧子

は、昭和六年八月二十四日の『読売新聞』の夕刊の「世に男はあるものを！」というコラムの中に「舞台の男姿に／相寄つた二つの魂／おゝ甘きかな／レヴユウガールと十四歳」という見出しで、

少女——京橋区木挽町七三宮崎みえ（二四）（仮名）松竹レヴユウのステージに、輝やかしいフット・ライトを浴びて、あるひはシツクな背広姿の、あるひはシヤンとしたシルクハットのいとも雄々しい水ノ江瀧子嬢の男姿に恋着して、たうとう「私の愛する」「私の小鳩よ」と、五尺の男なんざ、はるかに及ばない、あんかなる恋（おう！）に陶醉してゐたのだつた

男役の彼女に、お下髪の少女、——それは二千年まへの、ギリシヤの美姫、ピリチスの教へをそのままに代官山のアパートの一室に、レスボスの島の夢を再現したわけである

などと書かれている。また、昭和九年六月十五日の『読売新聞』の朝刊には、大槻憲二が「同性愛の精神分析」というコラムで、「同性愛も恋愛も／所詮は『自己恋慕』／内に庄へられてゐる自分を見出し／▽……幻に恋をする！」という題で、ナルシス型対象選択による同性愛について「最近のレヴユウを見て面白いのは女性の男装です。水ノ江瀧子のやうに多くの女学生にファンを持つといふのも女学生が水ノ江瀧子の中に抑圧された自分を男の俳優よりもより多く見出す」からだと、男装のレビュウガールに言及している。このように男装のレビュウガールは、少女達のあこがれの的であり、思慕の対象として人気を博しているが、「男装の麗人」という語で表現されることはなく、

あくまで女優として扱われている。

それは「人間豹」の中でも同様であり、作中で「レヴィウ仮面」というセルロイド面が流行した際の描写が次である。

女学生は女学生で、このお面のカムフラージュによって、

あこがれのボーイッシュ・ガールを、声を借しまず声援をすることが出来た。（『仮面時代』章）

「男装の麗人」とレビュウについて、昭和九年三月八日の『東京朝日新聞』の朝刊の記事が示唆に富んでいる。前田多門氏が東宝劇場の柿落として上演された『男装の麗人』について書いたコラムである。その中で、「男装の麗人とはいふが、八重子は気を良くして自由自在に男装から女装に、女装から男装に入入する」とある。前田の書きぶりから、やはり「男装の麗人」という語にはずつと男装で生活する川島芳子のイメージがにじんでおり、主演の水谷八重子ことは「永遠の中性女子」という呼び方をしている。しかしこの八重子の姿は乱歩の描いた女賊黒蜥蜴像と重なりあう。黒蜥蜴の容姿や、男装と女装とを自由に使い分ける描写は、「男装の麗人」という語から想起される姿よりもレビュウガールに近しいことがわかる。

以上より、「男装の麗人」と形容される女賊黒蜥蜴のモデルとして川島芳子がいることは、同時代の話の使用状況からも明らかである。そして、その川島芳子像の典拠は村松梢風『男装の麗人』の主人公・満里子である。しかし黒蜥蜴の容姿や描写はレビュウガールのものであり、これは当時の「男装の麗人」像とは乖離している。ただし「黒蜥蜴」執筆当時に川島芳子をモデルとした映画『満蒙建国の黎明』が上映されていたり、また「黒蜥蜴」連載の二ヶ月後には『男装の麗人』が東宝劇場

で上演されていることから、川島芳子と演劇を結びつけることは可能であったと思われる。それでも乱歩がレビューガールの特徴を持つ黒蜥蜴の形容に、あえて川島芳子を指すと認識されていた「男装の麗人」という語を用いたことは新規的であったと言える。

当時日本軍のスパイとして知られていた川島芳子であるが、世間に流布していたイメージは「東洋のジャンヌ・ダルク」という救国の乙女的なものであり、女賊黒蜥蜴の毒婦のイメージとは相容れないものであった。また「暗黒街の女王」章でダンスを踊る黒蜥蜴の腕には黒い蜥蜴の入墨が彫っており、それが名前の由来として説明される。これも川島芳子には見られない黒蜥蜴の特徴と言える。このように川島芳子をモデルとしただけでは説明しえない点について、次章で歌舞伎作品からの影響を検討する。

## 第二章 黒蜥蜴に見る毒婦の造形

### 一 江戸川乱歩と歌舞伎

江戸川乱歩が歌舞伎を愛好していたことは、昭和二十六年の『演劇界』のインタビュー<sup>〔十四〕</sup>に詳しい。「子供のときから、名古屋の御園座へ連れていってもらったもんだった。御園座という小屋は、東京からも大阪からもよく歌舞伎がきて、その点、両方のものを見られたんでよかったですと思う」、「東京へ出て来て早稲田に入ったんだが、勿論貧乏学生だし苦学生だ。それでもよく見にいったもんだ」と子供の頃からずっと歌舞伎を好ん

で見に行っていたことがわかる。歌舞伎の好みについては、「歌舞伎らしいもの……大時代の物が好きだな。近松も黙阿弥も読んだりして両方とも好きなんだが、歌舞伎でなくては味わえない、古典的な味というのは、やはり大時代な物にある」、「元禄歌舞伎の時代が好きなんだ」と語っている。しかし、一番強く印象に残っているものには、羽左衛門と梅幸の「累」をあげている。これは十五代目市村羽左衛門と六代目尾上梅幸の「色彩間苺豆」<sup>〔十五〕</sup>である。「大時代な物……荒事なんかが好きだといったのと喰いちがうけれど、世話物でもいい」と世話物も好んでいたことがうかがえる。

このように歌舞伎を好んでいた乱歩は、歌舞伎世界に日本人の探偵趣味の源泉を見ている。随筆集『悪人志願』（昭和四年六月 博文館）に収録された「日本人の探偵趣味」（『文芸時報』大正十五年四月初出）<sup>〔十六〕</sup>の中で、日本の創作探偵小説が外国探偵小説の模倣に過ぎないという言説に対して、「歌舞伎芝居の世界は、探偵趣味、犯罪趣味、怪奇趣味を以て充たされ」ており、それを愛好する日本人が探偵小説を生み出す素地は十分にあり、「決して物まねのつけ焼刃でない」と述べている。最後には行き詰まりを感じている日本の探偵小説文壇に対して次のように呼びかけている。

我々はおつと南北や黙阿弥に親しみ、彼等の作物を味読して見なければならぬのではないか。「南北に帰れ」私は日本の探偵作家（自分を加えて）にこんな風に呼びかけて見ようかとも思う

以上より、「黒蜥蜴」執筆当時、乱歩が南北、黙阿弥に探偵小説趣味を認め、親しんでいたことは間違いない。また、観劇

のみならずテキストとして読むことも好んでいたことは、乱歩がどこまで歌舞伎の演目を知悉していたかを考える上で重要である。新保博久・山前謙編著『幻影の蔵——江戸川乱歩探偵小説蔵書目録——』（平成十四年十月 東京書籍）付属の江戸川乱歩蔵書データベースを参照すると、南北、黙阿弥のテキストとして、坪内逍遙・渥美清太郎校編『大南北全集』（全十七巻 大正十四年—昭和三年 春陽堂）を全巻、河竹糸女補・河竹繁俊校編『黙阿弥全集』（全二十八冊 大正十三年—大正十五年 春陽堂）を首巻から第十九巻までを所持していたようである。これらのテキストを参考として、女賊黒蜥蜴のモデルへ影響を及ぼしたと考えられる作品について検討を行う。

## 二 四世鶴屋南北の生世話物

### (i) 『お染久松色読販』

「黒蜥蜴」「名探偵の敗北」章に次のような場面がある。

三分間、かつきり三分間であった。

再び彼女の部屋のドアが開くと、そこから一人の意外な青年紳士が出て来た。格好のいゝソフト帽、派手な柄の背広服、気取った鼻眼鏡、濃い口髭、右手にはスネークウツドのステッキ、左手にはオーバーコート。

これが僅か三分間の変装とは、お染の七化けも跣足の早業、魔術師と自称する「黒蜥蜴」でなくては出来ない芸当だ。

四世鶴屋南北『お染久松色読販』（初演…文化十「一八一三」

年三月 森田座）において、主役の女形がお染、久松含む七役を早替りで務めることから、通称を「お染の七役」という。「お染の七化け」とはその早替りの演出を指し、黒蜥蜴の変装の素早さを喩えている。

初演時にお染の七化けを演じたのは、五世岩井半四郎で、その時の七役は、「油屋娘、お染、同丁稚、久松、奥女中、竹川、お染母、貞昌、久松云い號け、お光、喜兵衛女房、土手のお六。賤の女、鶴土手のお作」<sup>（千七）</sup>である。その中でも土手のお六は当たり役で、二年後の文化十二「一八一五」年五月、河原崎座で上演された『杜若艶色紫』で土手のお六が再登場し、八ッ橋と二役で五世半四郎が再び務めている。この土手のお六は「悪婆」という役柄である。『演劇百科大事典』の河竹繁俊氏が書いた「悪婆」の項によると、

字義からいえば悪人の老婆であるが、単なる悪人型でなく、また年齢も老婆と限らず、多くはいわゆる毒婦とよばれる中年層である。（中略）その由来はそう古くなく、ふつう寛政四年（1792）に四世岩井半四郎が三月月おせんを演じた以来とされている。<sup>（千九）</sup>

と定義されている。渥美清太郎氏は土手のお六について、

これ（筆者注…土手のお六）が半四郎の演じた中で最も好評のあつた毒婦です。これには三種類あつて『於染久松色読販』『杜若艶色紫』『江戸製連理帯屋』と、各々異つた狂言に何れも現はれます。土手のお六といふ名は、今なら蝮のお政とか、高橋お伝とかいう風に、当時の代表的毒婦として喧伝されたものです。<sup>（千九）</sup>

と述べている。渥美氏は『大南北全集』第九巻の「解説及年表」



の中で、『杜若艶色紫』の土手のお六について、「於染久松色読販」の中の、土手のお六という悪婆を再出して」と書いてるように、歌舞伎の「悪婆」は、しばしば「毒婦」という語で説明される。「毒婦」という語のイメージの一つとして、「悪婆」が捉えられていたようである。

『お染久松色読販』における土手のお六の見せ場は、二幕目「瓦町油屋の場」の強請り場である。土手のお六と亭主の喜兵衛はそれぞれの理由で百両を欲しており、お六が縫い直しを頼まれた裕が、依頼主の百姓久作が瓦町の油屋の番頭と喧嘩になってその仲裁でもらったものであること、さらに丁度行き倒れの死体があったことから、弟の死体とでっち上げて油屋から百両をゆすり取るうとする。最初は「これはマアあなたには、初めてお目にかゝります。私は葛西領に居ります者でござりませぬ」と丁寧な話をしているが、いざ死体を見せてからは口調ががらりと変化する。

ろく モシ／＼何だえ、強請がましいえ。エ、よしてもおくれ。なんぼしがねえ暮らしても、小強請騙りをするような、そんなわつち等ぢやアねえよ。これでもお前吉原の、土手に住まったその時にやア、小見世の客を引手茶屋、土手のお六と云われちやア、素見手合いに立引いたか、今ぢやア、それも不仕合せ、小梅代地に九尺見世、亭主は江戸へ手問仕事、鼻アは内で洗濯や、鼻ア煙草と評判の、云はゞ真面目な商人だ。そんな嫌味のあるのぢやア無えよ。喜兵衛さん、こりやア、出る所へ出にやア解らねえぜ。

伝法言葉で啖呵をきつたはいいが、その後久作本人が油屋へ現

れ、死体も蘇生したことで強請りは失敗し、お六と喜兵衛は空駕籠を担いで退場することとなる。

この強請り場について、野口武彦氏は、

五世半四郎の扮するあだつばい美女の朱唇から男まさりの凄んだ文句が飛び出す二重の倒錯美は、化政度の観客に慄然とした快感を与えたものらしい。こうした女のゆすり場や殺し場は、これまたプロットの背景からなれば独立した見せ場である。舞台の上の女たちは、いまや弥生狂言風の女の世界での陰湿な葛藤からも、男たちの「悪」の補助的存在であることからも解放されて、みずから「悪」の自己主張とでもいべきものを開始する。<sup>二五</sup>

と五世半四郎の土手のお六の演技によって、女が主体となって悪をなす「悪婆」が役割として確立する契機となったことを指摘している。

林久美子氏は、「悪婆の本質」を考える上で「芸城の広さ」が重要だとし、その典型的な例として、五世半四郎の七役の早替りをあげている。

愛嬌第一の若女形半四郎親子と、怪談狂言や敵役で凄味を売り物にした松助親子では、悪婆の形象も異なつて当然である。双方に共通するのは、美貌と色気のほかに、芸城の広さである。荒事やスケールの大きい悪役までこなせ、早替りも得意であつたこと、これは悪婆の本質を考える上で重要なことである。典型的な例が『お染の七役』で、五世半四郎が若衆の久松のほか、町娘、田舎娘、奥女中、商家の後家、百姓女房と悪婆を一つの芝居で演じ分けるのである。(中略) 松助の変身・早替りは、被害者と加害者、

男と女の双面的性格を持つものであり、妖怪・亡霊にも変身する。(中略) 役者は変身すると、その姿に応じた性格の違いを演じ分ける。(二二)

林氏は「松助の変身・早替りは、被害者と加害者、男と女の双面的性格を持つ」と述べているが、「男と女との双面的性格」は『お染久松色説』で七役を演じる五世半四郎にも言えることである。立役と女形の演じ分け、そして野口氏の言うお六の演技に見られる「二重の倒錯美」もこれにあたるものであろう。

女賊黒蜥蜴は作中で色々な呼び方をされるが、その中でも映画俳優のTから「毒婦」と呼ばれる。先に述べたように昭和初頭には、「毒婦」は歌舞伎の「悪婆」を指す語としてしばしば用いられている。女賊黒蜥蜴を指す「毒婦」の中にも歌舞伎の「悪婆」を見ることができるとはならないだろうか。

まず変装については、先にあげた青年紳士のほかに、タクシ―運転手、岩瀬早苗、洋装・和装の緑川夫人、下級商人のお神さんと、成り代わりの変装を含めて幅広く七役をこなしている。早替りという点についても、たった十分程の間に背広の男姿になって、「これだけの変装を僅か五分間にやってのけた早業」、「変装と来てはお手のもの」と、その変装の手早さが示されている。

また、Kホテルでの岩瀬早苗誘拐について、予告の十二時を迎えるまでは貴婦人らしい作法で明智と接していた緑川夫人に扮する女賊黒蜥蜴が、十二時を過ぎ勝利を確信すると「つい貴婦人らしい作法をさへ忘れて」、「紅い唇を毒々しく歪めて、態とゆつくり／＼物を」言っている。そして、ついに正体を暴かれてしまった際には、

フフフ、これが今晚のお芝居の大詰って訳かい。マア、名探偵って云われるだけのことはあったわね。今度はどうやらボクの負けだね。負けということにして置こうよ。だが、それで、どうしようっていうの？ボクを捕縛しようとも思っているの？そいつは少し虫がよすぎはしないかしら。探偵さん、よく思い出してごらん。あんた何か失策をしてやしない。エ、どうなの？うっかりしている間に、何か無くしやしなくって、ホホホ……

(名探偵の哄笑) 章  
と男言葉混じりの口調となっている。「男と女の双面的性格」が現れている場面と言えるであろう。

このように、女賊黒蜥蜴のモデルとして歌舞伎の「悪婆」の姿が見て取れる。次に『桜姫東文章』(初演・文化十四「一八一七」年三月 河原崎座)を取り上げ、主人公の桜姫が黒蜥蜴のモデルとなった「悪婆」であることを考察する。

## (ii) 『桜姫東文章』

『桜姫東文章』は「清玄桜姫」と「隅田川」の世界を綯い交ぜにした作である。従来の清玄桜姫物は「今まで道徳堅固であった清玄が、偶然の機会から桜姫の肉体に触れ、墮落して寺を出て、庵室にひきこもって桜姫のことばかり思っている時、館を逃げた桜姫がきて出会う。清玄は驚喜して桜姫に迫り、ついに桜姫のしもべに殺されるが、怨念去らず姫にあだをする」(二二)という筋で、清玄を主として物語が構成される。しかし、『桜姫東文章』において南北は桜姫を主人公に据え、釣鐘権助とい

う悪役を登場させることで、姫から小塚原の女郎にまで落ちる桜姫を描いている。

「序幕 新清水の場・桜谷草庵の場」は、桜姫の出家を巡る話である。桜姫は生まれつき左手が開かず、それを理由に許嫁の人間悪五郎から縁を切られたことで出家を決意する。出家を決意した姫に、高僧清玄が十念を授けると左手が開き、清玄の名が書かれた香箱の蓋が落ちる。実は桜姫は、十七年前清玄が契った白菊丸の生まれ変わりだったことが判明する。周囲の者は出家を思いとどまるように説得するが、桜姫の決意は揺るがない。実は、桜姫は以前襲われて一夜の契りを結んだ男に惹かれ、他の男と契ることを厭つての出家の願いであつた。その男のよすがとして、その晩目にした入墨を自分の腕にも彫り込んでおり、悪五郎の恋文を持つてきた権助の腕に同じ彫り物を見つけると、

桜姫 これを見てたも。

ト左の袖を捲ると、権助の通りに、鐘に桜の刺青して居る。と入墨を見せて権助に迫る。権助も「併し折助にお姫様。飛んだ夫婦だ。(ト云いながらあたりを見て) 久し振りだの。」と草庵で濡れ場を演じる。この後、事が露見し、権助は逃げ、桜姫は不義の罪を清玄に着せ、共に追放される。後の場面で桜姫は女郎に身を賣すことになるが、その際にこの入墨によって「風鈴お姫」と呼ばれるようになる。

この入墨にまつわる話は南北ならではである(二十三)。黒蜥蜴の名前の由来ともなつた入墨も左腕に彫り込んである。

美しい女の左の腕に、一匹の真黒に見える蜥蜴が這つていた。(中略) 真に迫つた一匹の蜥蜴の入墨であつた。

乱歩が女賊の入墨に黒蜥蜴を用いたのは、タイトルの典拠となつた広津柳浪の「黒蜥蜴」(二十世)の影響である。柳浪の「黒蜥蜴」において黒蜥蜴は青蜥蜴よりも強力な毒として描写される。その強力な毒性が「毒婦」黒蜥蜴にふさわしいと乱歩は考えたのである。

次に桜姫と黒蜥蜴の話し方に着目する。「六幕目大詰 山の宿場の場・三社祭礼の場」では、桜姫は再会した権助に女郎屋に売られる。そこで御殿言葉と伝法言葉が混ざつた話し方をすること、そして腕の刺青から「風鈴お姫」と称されるようになる。しかし、枕元に清玄の幽霊が出ることで客が離れ権助の元に戻される。

桜姫 判人衆の為にやアなるが、亭主の為に。妾はならぬかえ。コレ、自らが鞍替より、アレあの女は何処から連れて来たのだ。コレ、口広いこつたが、主の下っ歯と極つた女子は、自らより外この日の本に二人とあつていゝものかな。その上にまだいとけなき、見りやアあの女の子が、とつてもねえ、お乳や乳母に抱かせて、養育あらばイザ知らず、自らなぞは子供は嫌いだよ。エ、しみつたれな。好かねえ事を、よしねえな。(二十世)

その言葉遣いを聞いた権助は「ちつとの間に、せりふは余ッ程仕込まれたと見えるが、どうしても、まだお姫様が抜けねえわえ」、「こいつはお姫様の中へ、悪婆を等分に浚い込んだから、手打ちならツナギというところ」と批評している。この独特な話し方も南北独自の設定である。

桜姫が御殿言葉と伝法言葉が混ざった話し方をするように、黒蜥蜴は「男と女とちやんぼんの言葉遣い」をする。

「ホホ、ホホ、まだ威張っているのね。君でなけりやそれでいゝのよ。僕の方にも考えがあるんだから。時に、そのお嫁さんお気に召したかい。」

黒衣婦人（筆者注…黒蜥蜴）がなぜか別の事を言い出した。青年が黙っているのよ、再び云う。

「お気に召したかつて聞いているのよ。」

青年は隅つこの早苗さんと、チラツと目を見交したが、「ウン、氣に入つた。氣に入つたから、この人だけは、俺が保護するんだ。貴様なんか指一本だつて差させはしないぞ」と叫んだ。

「ホホ、ホホ、多分そんなことだろうと思つた。それじゃ精々保護してやるがいゝ。」（「人形異変」章）

桜姫の伝法言葉が付け焼き刃のように、黒蜥蜴は男言葉がそれにあたる。「再び人形異変」章において、海に抛り込んで殺したと思つていた明智小五郎が生きていて、そもそも海に抛り込んだのは自分の仲間だと明智から暴露された黒蜥蜴は、「流石の女賊も毒氣を抜かれて、まるで貴婦人のおしとやかな口を利」くようになる。ここで「毒婦」から「毒」が抜け、ただの貴婦人に戻ってしまうのである。女賊黒蜥蜴の過去は語られない。しかし、普段の変装が緑川夫人であることから、上流階級出ではあるが賊に落ちた人物として造形がなされていると考えられるのではないだろうか。このように、南北独自の設定部分で、桜姫と黒蜥蜴に共通項が見いだされる。

次に、物語の結末について検討する。『桜姫東文章』の最後では、清玄の幽霊から手元の子供が桜姫の実子で、権助が桜姫の敵であり清玄の実弟でもあることを教えられる。そして酔つ払つた権助は桜姫の家族を殺し家宝の都鳥一卷を奪つたことを桜姫に暴露してしまう。それを聞いて桜姫は、実の子供と権助を殺して敵を討ち、都鳥一卷を取り戻しお家再興を叶える。その後桜姫は人殺しとして追われる身になり、桜姫は葛籠に入り、桜姫に扮する粟津七郎に背負われての逃亡で幕となる。

桜姫の恋が実は敵同士の恋であり、それを知つた桜姫が敵の権助を殺すことでその関係は終わりを迎える。恋を捨て敵を討ちお家再興を果たす桜姫には、武家の娘としての矜持が見て取れる。

「黒蜥蜴」における恋愛も探偵と女賊という敵同士の恋として描かれており、その関係は追い詰められた黒蜥蜴の自殺によつて幕を閉じる。警察に捕まることをよしとせず自死を選択するところに、黒蜥蜴の女賊としての矜持が現れている。

二人の女主人公がそれぞれの矜持を守ること、敵同士の恋が終わるといふ点で共通項が見られる。

最後に、『桜姫東文章』において、青蜥蜴の妻が出てくる点に触れる。「五幕目 岩淵庵室の場」で桜姫の局であつた長浦と清玄の弟子の残月のわび住まいにたどり着いた清玄を金目的に殺そうとする際に用いられる。

長浦 コレ／＼、その青蜥蜴を罐子の中へ入れたは

残月 コリヤ。（ト囁く）。

長浦 ア、あれで師匠を

残月 これサ。あの毒でいかねえ時は、まだ仕様はいくら

もある。

清玄は毒をかけられ顔には半面青あざとなつたうえ絞殺される。その後蘇生した清玄が桜姫に迫り、桜姫は誤つて清玄の喉を刃でついで殺してしまう。そして清玄の顔の痣と同じものが権助の顔に出るという筋である。

この筋も南北独自のものであるが、「黒蜥蜴」の筋との関わりという点では薄い。蜥蜴の毒が南北独自の設定として、作中で用いられることを指摘するにとどめる。

以上の点より、女賊黒蜥蜴のモデルとして桜姫の存在があったことは十分言えるであろう。

また、一章において黒蜥蜴の人物モデルの典拠として村松梢風『男装の麗人』の主人公・満里子からくる川島芳子像をあげたが、満里子と桜姫においても共通項が見いだせる。高貴な身分の女性が零落する点、その女性によるお家再興という点、母子関係が見られる点において共通していると言える。桜姫も黒蜥蜴のモデルとして取られていると見ると、川島芳子をモデルとしただけでは不十分であった、毒婦のイメージ、腕の入墨にまつわる設定などを補完することができる。

次は、初出誌の記述を手がかりとして、河竹黙阿弥の白浪物からの影響について見ていくこととする。

### 三 『青砥稿花紅彩画』

社交界に出で、はダーク・エンジェルと持囃される黒天使、ナイト・クラブの舞踏室では、大胆不敵の裸体舞踊で知られた一個の美人露出狂、そのむっちりとした二の腕の

刺青を見れば、黙阿弥好みの女賊「黒蜥蜴」

〔暗闇の騎士〕章）

これは、初出である雑誌『日の出』第三巻第四号に掲載された「暗闇の騎士」章の冒頭である。雑誌連載中は掲載月の最初の章の冒頭に乱歩による前号までのあらすじが含まれている。このあらすじ部分は単行本に掲載される際は省かれてしまうため、ここで引用した箇所も初出誌で見られるのみである。

「二の腕の刺青を見れば、黙阿弥好みの女賊」とあるため、ここで乱歩が意識していたのは、河竹黙阿弥『青砥稿花紅彩画』（初演・文久二「一八六二」年三月 市村座）の弁天小僧菊之助であろう。

『青砥稿花紅彩画』「三幕目 雪ノ下浜松屋の場」では、武家娘に扮する弁天小僧が南郷力丸と共に浜松屋に強請りに入る。日本駄右衛門扮する玉島逸当に弁天小僧の女装を見破られると、「こう兄貴、もう化けてもいかねえ、おらあ尻尾を出してしまふよ」と武家の娘から盗賊の男へとがらりと変わる。その後には有名な長台詞があり、

弁天 知らざあ言つて聞かせやしよう、浜の真砂と五右衛門が歌に残せし盗人の種は尽きざる七里ヶ浜、その白浪の夜働き、以前を言やあ江ノ島で年季勤めの児ヶ淵、江戸の百味講の蒔金を当に小皿の一文字、百が二百と賽銭のくすね銭せえだん／＼に悪事はのぼる上の宮、岩本院で講中の枕捜しも度重なり、お手長講を札付にととうとう島を追出され、それから若衆の美人局、こゝやかしこの寺島で小耳に聞いた祖父さんの似ぬ声色で小ゆすりかたり、名さえ由縁の弁

天小僧菊之助とはおれがこった。

ト片肌脱ぎ桜の花の彫物を見せ、きつと見得。

と名乗りを上げて、桜の刺青を見せつけている。

『日の出』第三巻第四号には、「暗闇の騎士」、「名探偵の嗤笑」章が掲載されており、一時は明智への勝利に酔う女賊黒蜥蜴が明智に正体を見破られ、二―(i)の最後にあげた口上を言うところまでである。正体を見破られたことで犯行が失敗すると、口調を一変させ、見得を切った口上をのべる点で、話の展開に類似性が認められる。岡本綺堂も浜松屋の場について、「この浜松屋のときは一種の探偵的興味以外には何物も持たない」<sup>(二七)</sup>と言っているように、乱歩の言う日本人の探偵趣味が現れた場と言え、乱歩がKホテルでの明智と黒蜥蜴の闘争を描く際の典拠としたと考えてよいと思われる。

#### まとめ

以上より、女賊黒蜥蜴は、村松梢風『男装の麗人』の満里子からくる川島芳子像、そして鶴屋南北『桜姫東文章』の桜姫とを併せた人物表現がなされていることを示した。「男装の麗人」という語は執筆当時、川島芳子という実在の人物を指す語として認識されていたが、その語で形容される黒蜥蜴の描写はむしろレビュウガールの的になされており、演劇性が付与されている。レビュウガールの特徴をもつ女性に「男装の麗人」という語を用いることの新規性は先に示した。乱歩はこの新規的な試みによって演劇という共通項を作り出し、その人物造形に共通点が見いだせる近世の歌舞伎の登場人物と人口に膾炙した近代的な

女性とを融合させている。このことよって、「黒蜥蜴」のKホテルでの明智との闘争や、敵同士の恋といった歌舞伎の影響が見られる場に近代的な大衆性をもった女賊黒蜥蜴を違和感なく登場させている。「黒蜥蜴」は人物表現において近世作品と近代性とを上手く取り入れた作であると言える。

#### 〔付記〕

本文の引用は原則として初出により、通行の字体を用い適宜ルビや傍点を省略した。引用部の傍線は筆者が私に付した。

#### 〔注〕

- (一) 大内茂男「華麗なユートピア」『幻影城』第一巻第七号 昭和五十七年七月 絃映社
- (二) 堀江珠喜「江戸川乱歩と昭和ベルエポック」『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』第四十三号 平成七年
- (三) 明治四十年五月二十四日・昭和二十三年三月二十五日。愛新覚羅額・として清朝の肅親王第十四王女に生まれる。大正二年五歳の時に滿蒙独立運動の国士川島浪速の養女となる。大正十四年に断髪、男装を始め、名を芳麿と名乗る。昭和二年、上海に渡り。日本軍特務機関田中隆吉少佐と知り合い、日本軍のスパイとして活動する。そのため戦後中国側で処刑される。「東洋のジャンヌ・ダルク」「東洋のマタ・ハリ」などと呼ばれた。
- (四) 海老澤彩香「黒蜥蜴の表象をめぐる―江戸川乱歩『黒蜥蜴』論―」『大衆文化』第二十号 平成三十一年三月 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
- (五) 中相作「乱歩と三島 女賊への恋」『乱歩謎解きクロニクル』

平成三十年三月 言視舎)

(六) 滝口浩「解説」(『リバイバル(外地) 文学選集第三巻 村松梢風著『男装の麗人』』(平成十年十一月 大空社))

(七) 増田ビルブローカー銀行頭取令嬢、男性としての名は威希。協同映画女優西條エリ子と逃避行からの心中を図ったことで新聞を賑わす。昭和十年一月三十日の『東京朝日新聞』の朝刊で、エリ子と心中を図って昏睡状態に陥ったままの富美子の状態を知らせる記事の見出しに「死の国へ旅行気分／叛逆の無軌道娘／女護ヶ島に育つ」男装の麗人”／なほ昏々・睡り続く」と書かれた。

(八) 引用は村松梢風『男装の麗人』(昭和八年四月 中央公論社)による

(九) 入江たか子「東洋のジャンヌダルク」(藤田潤一編『滿蒙建国の黎明』(昭和七年六月 駿南社))

(十) 川島芳子こと金璧輝「何故に男装するのか」(『話』第一巻第七号 昭和八年十月 文芸春秋社)

(十一) 「川島芳子南京法廷へ」(『説売新聞』昭和二十二年二月二十五日朝刊)

(十二) 「川島芳子証人で南京法廷へ」(『東京朝日新聞』昭和二十二年二月二十五日朝刊)

(十三) 「人間豹」は昭和九年一月から昭和十年五月まで(昭和九年三月、四月休載)、『講談倶楽部』(講談社)で連載された。

(十四) 「江戸川乱歩氏に歌舞伎の話を訊く」(『演劇界』第九巻第七号 昭和二十六年七月 演劇新社)

(十五) 四世鶴屋南北はなせつねまねのたけのりけん『法懸松成田利剣』の一場面。通称「かさね」。

大正九年十二月に歌舞伎座で六代目尾上梅幸と十五代目市村羽左衛門によって再演され、この場面が度々上演されるようになった。

(十六) 引用は『江戸川乱歩全集 第二十四巻 悪人志願』(平成十七年十月 光文社)による

(十七) 『大南北全集』第六巻「解説及年表」

(十八) 河竹繁俊代表編『演劇百科大事典(第一巻)』(昭和三十五年三月 平凡社)

(十九) 渥美清太郎「歌舞伎に現われた毒婦」(『歌舞伎狂言往来』昭和二年六月 宝文館)

(二十) 野口武彦「毒婦物の系譜」(『国文学——解釈と教材の研究——』昭和五十一年八月 學燈社)

(二十一) 林久美子「悪婆」の魅力—歌舞伎の(悪女)—(鈴木紀子・林久美子・野村幸一郎編『悪女』の文化誌)平成十七年三月 晃洋出版)

林氏は、悪婆を完成させた立役者として、「四世の子五世岩井半四郎」と「立役であった初世(後の松緑)及び二世尾上松助(後の三世菊五郎)」をあげている。この頃書かれた四世鶴屋南北の悪婆物は主として五世半四郎当てであったが、松助親子も半四郎とは少し趣の異なる方面の悪婆を演じていた。

(二十二) 渥美清太郎「清玄桜姫物」項(河竹繁俊代表編『演劇百科大事典(第三巻)』昭和三十五年十月 平凡社)

(二十三) 渥美清太郎がこの場面について「お姫様の刺青といふのです。南北でなくては逆も出来ない芸当」と述べている。

渥美清太郎「桜姫東文章」に就いて(『演芸画報』第十年第六号 大正十二年六月 演芸画報社)

(二十四) 『江戸川乱歩全集 第九巻 黒蜥蜴』(平成十五年十月 光文社)の解説で新保博久氏が、「ちなみに『黒蜥蜴』という題名

は、必ずしも乱歩の独創ではない。往年に愛読した作家のひとり

広津柳浪の短編に「黒蜥蜴」（明治二十八年。岩波文庫『河内屋・黒蜥蜴』所収）がある」と、タイトルの典拠について言及している。

「広津柳浪の『黒蜥蜴』は、明治二十八年五月に『文芸倶楽部』に発表された短編小説で、貞淑な妻お都賀による義父吉五郎殺しの物語である。この義父殺しに用いられるのが黒蜥蜴の毒である。呉服屋の妻の亭主殺しの噂から青蜥蜴の毒について話を聞いたお都賀は、吉五郎に対して使ってみただが効き目はなかった。黒蜥蜴の毒は青蜥蜴の毒よりも強力な毒として物語中に登場する。その毒で吉五郎を殺し、お都賀も入水する。」

(二十五) この桜姫の一人称は最初「妾」を使うがすぐに「自ら」

へと戻っている。まだ姫として生活していた序幕での桜姫の台詞を見ると、

桜姫 サア、罪業深き自らが、これまでお願ひ申せし事、どうぞ

叶へてほしさの儘、今も今とて御坊へと、辿る折しも幸

ひと、お見上げ申すも仏縁の、導くところとそれゆゑに。

このように、一人称「自ら」は姫であった時のものであることがわかる。

(二十六) 岡本綺堂「弁天小僧」雑感（『演芸画報』第二十一年第

十一号 昭和二年十一月 演芸画報社）

(二)が ゆうき・本学大学院文学研究科博士後期課程